21932

8973

福岡市埋蔵文化財調査報告書第309集

Yama no hana

山ノ鼻１号墳

１９９２

福岡市教育委員会

序

古来から大陸文化の窓口として新たなる文物を受容してきた博多湾周辺の地域には、数多くの遺跡が点在し、そこには交流を物語る遺跡が残されています。

福岡市の西部にある狭長な今宿平野には、朝鮮半島との交渉史を解き明かすうえで重要な前方後円墳が12基もあります。これらの古墳群は４世紀から６世紀までの200年間に亘って造営され続けたもので、博多湾に面する平野を支配した首長層の消長と古墳時代の社会体制を解き明かす一翼を担っています。

山の鼻１号墳は、今宿平野に所在する12基の前方後円墳中でも初期に位置づけられる全長50ｍの前方後円墳です。墳丘は明治初年の「宮崎安貞」碑建立に際して大きく改変され、埋葬主体部は消失していますが、今宿平野における前方後円墳の系譜を考えるうえでは極めて貴重な古墳です。

福岡市教育委員会では、重要遺跡確認調査の一環として今宿平野における前方後円墳群の系譜解明とその位置づけに取り組み、今宿大塚古墳・鋤崎古墳につづいて1989（平成元）年に山ノ鼻１号墳の調査を行ないました。その結果、削平された後円部からは銅鏡片が出土したほか墳丘裾を巡る葺石を確認し、墳丘の形態と規模が判明しました。

本書は、この発掘調査成果を収録したものです。本書が皆さんに広く活用され、埋蔵文化財に対するご理解の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査に当たってご指導・ご助言をいただいた諸先生方を始め、多くの方々のご協力をいただきました。殊に土地所有者の徳永英一氏ご夫妻には格別のご理解とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成４年１月13日

福岡市教育委員会
教育長　　井口　雄哉

目　　次

Ⅰ．はじめに……1
Ⅱ．立地と歴史的環境……3
Ⅲ．墳丘……7
Ⅳ．埋葬施設……18
Ⅴ．その外の遺構……20
Ⅵ．おわりに……22
鏡片の保存処理と付着した赤色顔料について（本田光子）……23
山ノ鼻１号墳出土の鏡片の材質分析（江本義理）……24

福岡市埋蔵文化財センター
No.21932
-4.7.14

れ　い　げ　ん

1．本書は、1989年度に福岡市教育委員会が福岡市西区大字徳永で発掘調査した山ノ鼻１号墳の調査記録である。
2．本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
3．本書を掲載した遺構の実測は小林義彦と山口満が行なった。
4．遺物の整理実測と製図は小林が行なった。
5．本書に掲載した写真は遺構・遺物ともに小林が撮影した。
6．巻末には、江本義理氏（昭和女子大学）に「鏡片の材質分析」、本田光子氏（福岡市埋蔵文化財センター）には「ベンガラの分析」についての玉稿を頂いた。
7．本報告に係わる遺物・記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。
8．本書の執筆・編集は小林が行なった。

遺跡調査番号：８９７３	遺跡略号：ＹＨＫ－１	分布地図番号：120－Ａ－5
調査地籍：福岡市西区大字徳永字山ノハナ265－１外		
調査実施面積：　320㎡	調査期間：　1990年２月13～３月31日	

Ⅰ．はじめに

発掘調査にいたるまで

山ノ鼻１号墳は、福岡市西端の今宿平野にある全長50ｍの前方後円墳で、福岡市西区大字徳永字山ノハナ265－1に所在する。古墳は、高祖山から派生する低丘陵の先端部に立地し、丘陵端に前方部を配する。墳丘は、前方部が長く、くびれ部が細く締まる墳形をなしていることから同丘陵上に南接する若八幡宮古墳とともに古式の前方後円墳として注目されていた。しかしながら、後円部は明治初年に建立された「宮崎安貞」碑によって削平され、墳丘上は畑地や果樹園として開墾されているためにデータは一切なく詳細はほとんど知られていなかった。

福岡市西端にある狭長な今宿平野には、山ノ鼻１号墳をはじめとして12基の前方後円墳があり、これら前方後円墳群の発生と系譜の解明及びその歴史的位置づけが求められていた。山ノ鼻１号墳は、その基礎的データ収集のため重要遺跡確認調査の一貫として調査を実施した。この今宿古墳群における重要遺跡確認調査は、今宿大塚古墳、鋤崎古墳に続くものであり、ほかには若八幡宮古墳と丸隈山古墳が調査されている。

発掘調査は、墳丘の規模や構造および内部主体等の基礎データ収集を目的とし、墳丘の各部にトレンチを設定して実施した。調査の結果は、本書にその概要を示したが、とくに墳形についての新知見は今宿平野における前方後円墳の発生と展開を考える上で貴重な事例となろう。

なお発掘調査にあたっては、墳丘上に営まれた果樹園や作付けされた畑地へのトレンチ設定が必要となった。そのために作物の抜根を余儀なくされたが、地権者の徳永英一氏に心よくお許しいただいた。また、調査中にも色々な面でご理解とご協力を得た。ここに記して感謝の意を表します。

発掘調査の組織

調査主体　福岡市教育委員会

調査総括　福岡市教育委員会埋蔵文化財課

庶務担当　柳沢一男（第２係長）　飛高憲雄（第１係長）　松延好文　中山昭則

調査担当　小林義彦

調査補助　山口　満

調査・整理作業　尾園　晃(九州大学)　宇田倫明　大瀬良清子　岡　隆明　久保喜代子
坂田美佐子　島田清吾　田中聖子　櫟木竜治　土斐崎孝子　中村裕和
馬場イツ子　藤長幸子　堀　ウメ子　松本藤子　木村丞嗣

なお、発掘調査と整理報告にあたっては、岡村秀典（九州大学）、柳沢一男（宮崎大学）、山崎純男、大庭康時の諸先生・先輩方から貴重な指導・助言を賜わった。

1．山ノ鼻1号墳　2．山ノ鼻2号墳　3．若八幡宮古墳　4．下谷古墳
5．丸隈山古墳　6．飯氏二塚古墳　7．飯氏C14号墳　8．女原C14号墳
9．今宿大塚古墳　10．谷上B1号墳　11．本村A1号墳　12．鋤崎古墳
13．飯氏(兜塚)古墳

Fig. 1．周辺遺跡分布図（1/25,000）

II．立地と歴史的環境

山の鼻１号墳のある今宿平野は、福岡市の西端、玄界灘に面して開けた糸島平野の東北縁に位置する。この今宿平野は、北を今津湾に面してのびる海岸砂丘に、南を高祖山山塊によって画される東西長３km、南北幅１km程の狭長な小平野である。また、東は叶岳から長垂山とつづく小山塊によって早良平野と遮られ、西は糸島平野にむかって開口する。平野の東部には、高祖山から流れ出た小河川が小さな扇状地を造り出し、西部には砂丘後背地のラグーンが拡がっている。

今宿平野の属する糸島平野は、旧制下の怡土郡と志摩郡からなり、かっては北へ突出した半島の基部に糸島水道が東西に貫流していた。平野は、後背に連なる背振山系から派生した丘陵群によって幾つかの小地域（小平野）に画され、長良川・雷山川・瑞梅寺川等の河川が北流して玄海灘に流れ込んでいる。

この糸島平野には、42基の前方後円墳があり、それぞれの河川流域ごとに一群をなしている。つまり、(1)：糸島平野西部の長野川流域に分布する一貫山銚子塚古墳等の一群、(2)：瑞梅寺川・雷山川流域の旧伊都國の中心域に分布する端山古墳等の一群、(3)：河原川東岸の今宿平野に分布する丸隈山古墳等の一群、(4)：糸島半島南部の泉川流域に分布する御道具山古墳等の一群の４群にグルーピングできるが、全長103ｍの一貫山銚子塚や85ｍの丸隈山古墳を除いては総じて小規模なものがほとんどである。

No.	古　墳　名	所　在　地	立地	全長(m)	葺石	埴輪	埋葬施設	出土遺物・その他
1	山の鼻１号	福岡市西区徳永	丘陵上	50	○		竪穴式石室？	獣帯鏡片
2	山の鼻２号	福岡市西区徳永	段丘上	(60)	○		横穴式石室？	墳丘破壊
3	若八幡宮	福岡市西区徳永	丘陵端	(48)	○		木棺直葬	三角縁神獣鏡、碧玉製管玉、ガラス小玉、環頭大刀、鏃、剣、鉇、刀子、竪矧板革綴短甲、銅製有孔円板、土師器
4	下　谷	福岡市西区徳永	丘陵上	?			横穴式石室？	墳丘破壊
5	丸隈山	福岡市西区周船寺	丘陵端	84.6	○	○	横穴式石室	仿製鏡２、巴形銅器、硬玉製勾玉、碧玉製管玉、ガラス小玉、鉄剣、直刀、鉄鏃
6	飯氏二塚(子捨塚)	福岡市西区飯氏	段丘上	53			横穴式石室？	須恵器、埋葬施設破壊
7	飯氏Ｂ14号	福岡市西区飯氏	丘陵上	24			横穴式石室	
8	小松原	福岡市西区女原	丘陵上	24			横穴式石室？	墳丘半壊
9	今宿大塚	福岡市西区今宿	段丘上	64	○	○	横穴式石室？	埴輪、須恵器、陶質土器
10	谷　上	福岡市西区今宿	丘陵上	28			横穴式石室	
11	本　村	福岡市西区青木	丘陵上				横穴式石室	墳丘破壊
12	鋤　崎	福岡市西区今宿青	丘陵端	62	○	○	横穴式石室	鏡６(舶載2、仿製4)、銅釧2、勾玉、管玉、ガラス玉、滑石製臼玉、櫛、素環頭大刀、直刀、剣、鉄斧、鎌、蕨手刀子、鉇
13	飯氏（兜塚）	福岡市西区飯氏	段丘上	31	○	○	横穴式石室	鏡(径５寸)、鐙の金具

Fig．２．今宿平野の前方後円墳一覧

これらの前方後円墳群は、4世紀前半～後半にかけて各群ごとに造営が開始されるが、その展開や消長は各流域によって異なる。今宿平野の古墳群が6世紀後半代まで首長墓として系譜的に継続するのに対し、泉川流域に分布する一群は5世紀中葉頃に途絶してしまい政治的、経済的社会基盤の脆弱性を窮わせる。

この中で山ノ鼻1号墳のある今宿平野には、本墳をはじめとして12基の前方後円墳が高祖山から派生する丘陵上や段丘上に立地し、その後背する高祖山北麓には300基以上の小円墳が群集している。この12基の前方後円墳は、墳丘規模等から山ノ鼻1号墳、2号墳、若八幡宮古墳、下谷古墳、丸隈山古墳、飯氏二塚古墳（子捨塚）、今宿大塚古墳、鋤崎古墳等の一群と飯氏B14号墳、女原C14号墳（小松原古墳）、谷上B1号墳、本村A1号墳等の一群とに分けられる。前者の8基は、丸隈山古墳の85mを最大として墳長が50mを越えるもので、丘陵上に独立的に造営されるものである。埋葬主体も若八幡宮古墳は木棺直葬であり、鋤崎古墳や丸隈山古墳は導入期の横穴式石室である。また、副葬遺物も銅鏡や玉類の装飾品をはじめ竪矧板革綴短甲、鉄剣、鉄鏃等の武具や鉄斧、刀子等の工具類と多岐にわたり、質量ともに豊富である。これに対して後者の4基は、墳長が30m未満の小型の前方後円墳で、群集墳中に混在して立地する。埋葬主体は両袖形横穴式石室で、6世紀後半代以降に造営されたものである。このように両者の間には隔世の差異が認められる。つまり、前者の大型古墳は、今宿平野における盟主的な同一系譜上の首長墓として、後者の小型古墳は後期にいたって急速に勃興する群集墳中での盟主層として位置づけられる。

一方、古墳時代の集落遺跡としては、大塚遺跡や女原遺跡等がある。いずれも6～7世紀の集落址で、20～40棟の竪穴住居址と掘立柱建物址群からなり、谷の入りこんだ丘陵の緩斜面上に立地する。

同時に海岸部では製塩、山麓部では須恵器と鉄の生産が行なわれている。

磨製石斧の生産工房址として著名な今山遺跡下の海岸砂丘では布留併行期の製塩土器が多数出土している。製塩炉址は未検出ながらも塩生産の証左となるものである。

高祖山北麓には、須恵器窯址の新開窯址がある。窯址の規模や生産の継続期間等は確定しえていないが、生産開始期は第Ⅰ型式期に遡ることが明らかにされている。また、この山麓一帯の谷間には20ケ所にのぼる鉄滓の散布地が確認されており注目される。今宿平野を含む玄海灘一帯は、良質な砂鉄を産する花崗岩地帯であり、その砂鉄を素とした鉄生産が行なわれたものであろう。その開始は6世紀後半代と推定される。山麓に分布する群集墳中にはこの鉄滓を供献した古墳もあり、工人集団との関わりを示唆するものであろう。

このような活発な生産活動は、平野に展開する古墳群の生成基盤を支えた証左例となるものであろう。

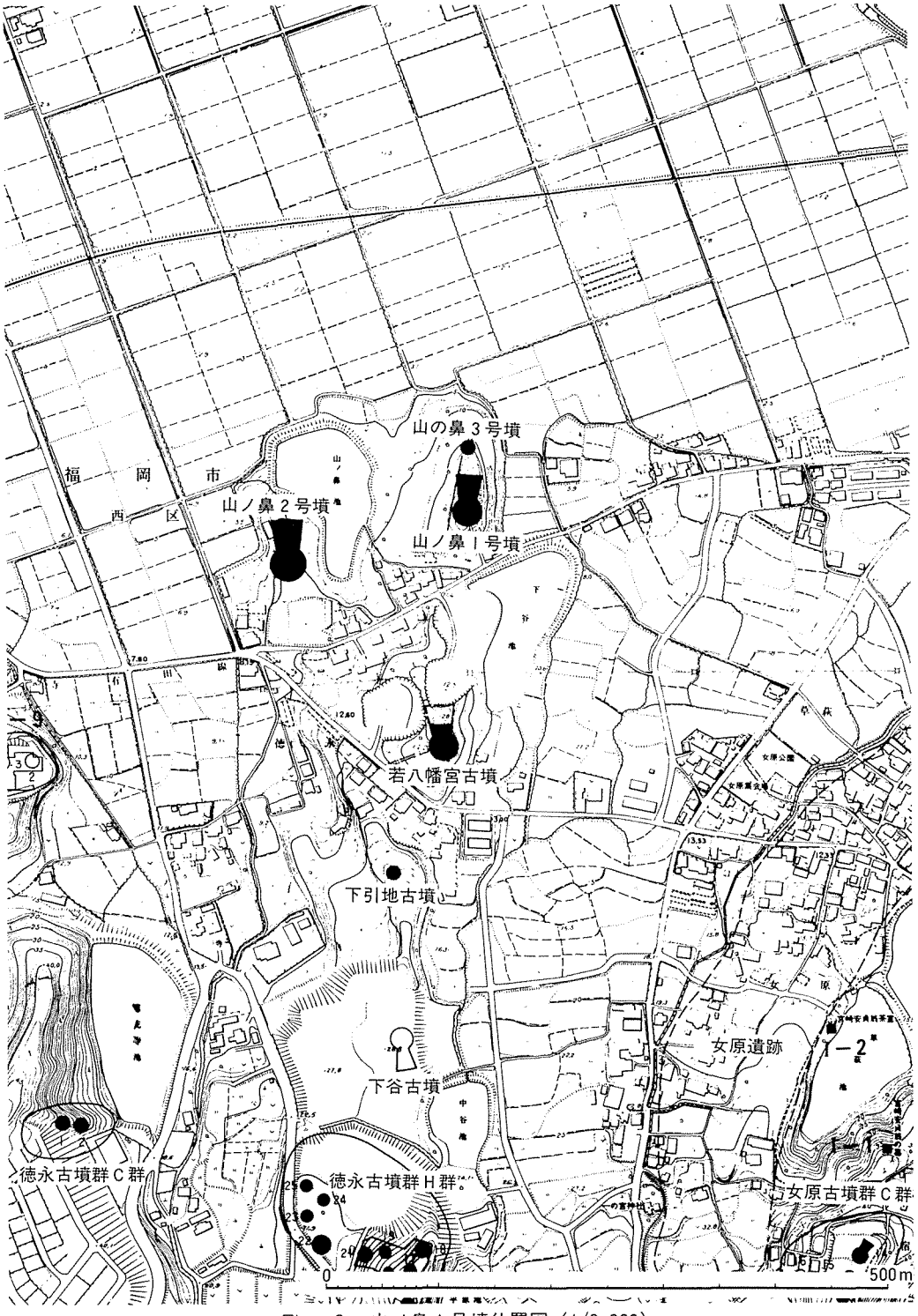


Fig. 3．山ノ鼻１号墳位置図（1/6,000）

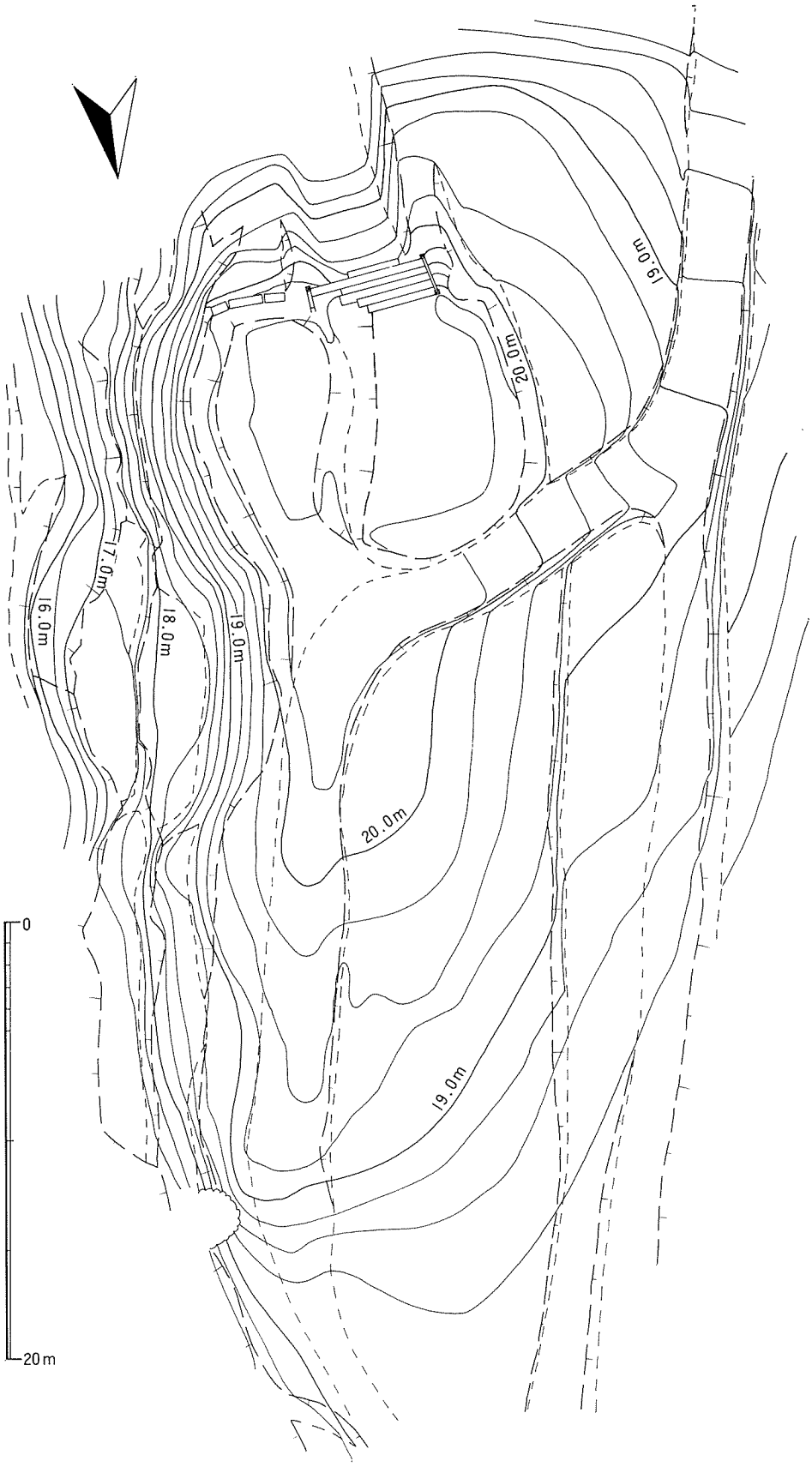


Fig. 4. 山の鼻1号墳墳丘実測図（1/300）

Ⅲ．墳丘

山ノ鼻１号墳は、標高416ｍの高祖山から北へむかって八ツ手状にのびる丘陵尾根の先端部に立地する。古墳は、丘陵の高まりを利用して前方部を丘陵端に配し、後円部を南側の丘陵後背に向けて築造された前方後円墳である。同丘陵の尾根筋には、若八幡宮古墳と下谷古墳の２基の前方後円墳がある。また、若八幡宮古墳から又状に分岐した低段丘上には山ノ鼻２号墳が谷を隔てて西に並置している。

墳丘は、全体に開墾による改変が著しい。後円部は、明治の初めに建立された「宮崎安貞」の顕彰碑によって墳頂部が大きく削りとられ、背面には石碑に通ずる階段が掘り込まれている。また東側は、大戦中の高射砲陣地構築で削平されている。そのため後円部の現況は、南北11ｍ、東西６ｍ、高さ40～80cm程の西側残丘を留めるにすぎず、墳頂は少なくとも２ｍ程が削平されていよう。前方部から後円部の西側縁は、畑地や果樹園として可耕されてなだらかな緩傾斜をなしている。東側縁は、丘陵傾斜面でくびれ部が良好に観察されたが、それは高射砲陣地構築の排地と開墾による土留めが墳丘に沿ってなされた結果であった。また、前方部前縁は後円部端から約30ｍの傾斜面が考えられた。このような封土の流失や人的堆積による改変で段築の有無や墳丘裾線の確認は測量時にはできず、ただ前方部が長く、開きの緩い前方後円墳があろうことだけが想定された。

墳丘規模は、前方部東側をNo.１として東廻りにNo.13まで墳丘各部にトレンチを設定して確認した。しかし、前方部東側は諸般の制約から十分な確認はできなかった。

Ｆｉｇ．５．山ノ鼻１号墳全景（南から）

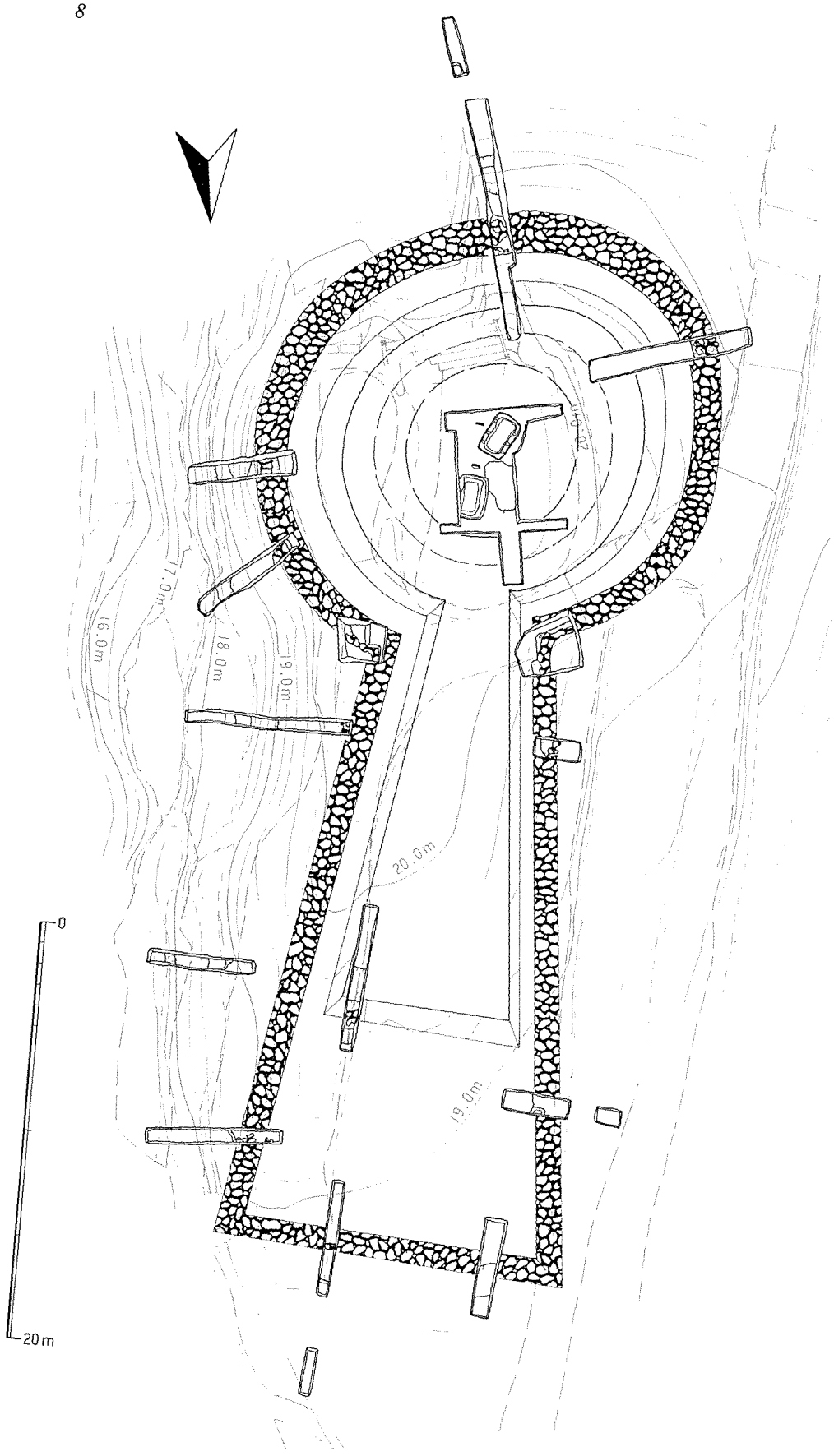


Fig. 6. 墳丘トレンチ位置図

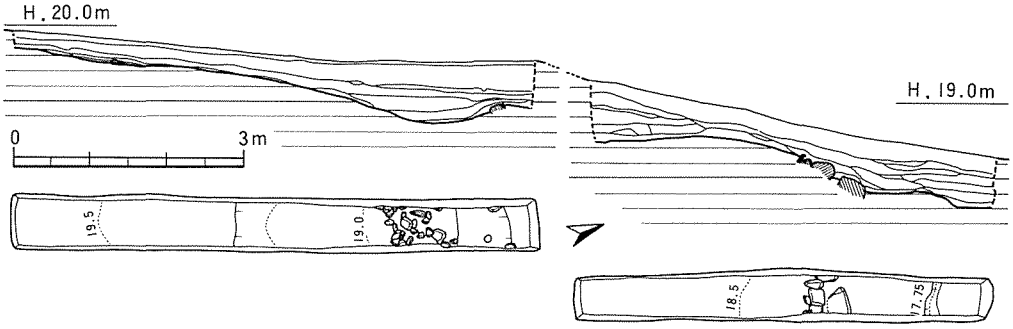


Fig. 7. I－b・Cトレンチ実測図（1/100）

1）. 前方部

1トレンチ（Fig. 7・8）

前方部の東寄りに位置して設定し、北より1a、1b、1cトレンチとした。1cトレンチは南半が平坦で、中央部から北は緩傾斜して立ち上がり溝状をなす。この溝中には拳大～小児頭大の円礫が混入していた。1bトレンチでは、中央部で葺石基石列を検出した。基石には大ぶりの花崗岩を横位に据え、その上に拳大の転石を葺いている。基石から北は約1mの平坦面があり、20cmほどの段を造って1aトレンチへ緩傾斜して続く。これらのことから1bトレンチの葺石基石列をI段斜面葺石基石、1b～cトレンチへ続く平坦面をI段テラス面とし、1cトレンチの溝はII段斜面として捉えられよう。基底面のレヴェルはI段目が17.8m、II段目が18.7mを測る。

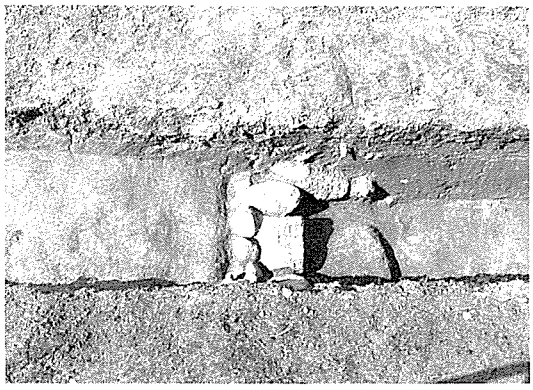


Fig. 8. Ibトレンチ前方部前面葺石（東から）

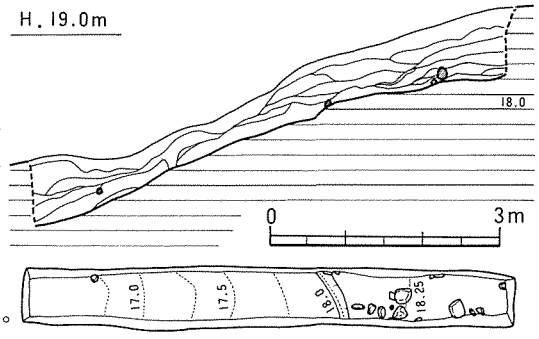


Fig. 9. 2トレンチ実測図（1/100）

2トレンチ（Fig. 9）

前方部東斜面の北寄りに位置して東西に設定した。東側くびれ部から推定される墳丘裾線は防風用の杉と資財場の下になり、葺石等は検出できなかった。地山は緩やかな平坦面を造った後に傾斜し、平坦面には墳丘斜面を葺いたと思われる転石が散乱していた。

3トレンチ（Fig. 10）

前方部東側斜面のほぼ中央部に東西方向に設定した。2トレンチ同様に予想される墳丘裾線

は資財場の下にあたり葺石等は検出できなかった。地山は開墾による改変で、緩やかな階段状をなす。

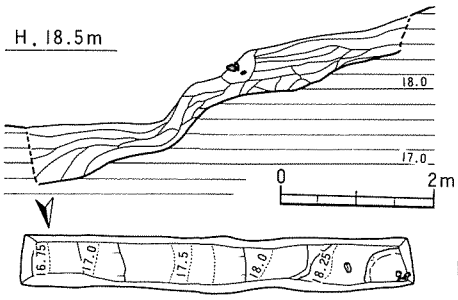


Fig. 10. 3トレンチ実測図（1/100）

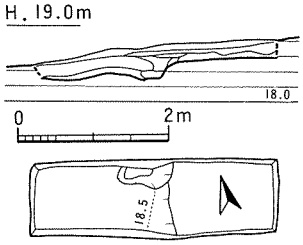


Fig. 11. 11トレンチ実測図（1/100）

11トレンチ(Fig.11)

前方部西側斜面の北に位置して設定した。開墾による削平が著しく、耕作土は薄い盛土を残して地山に至る。地山はトレンチ中央部で小さな段を造り、東側は平垣になる。改変されているが、この段がⅠ段目斜面の地山整形痕で、平垣面がⅠ段テラス面であろう。

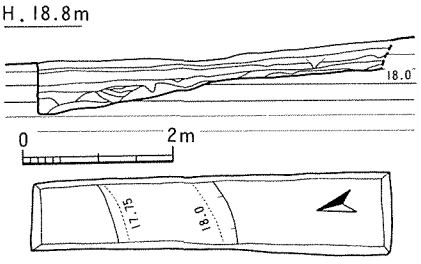


Fig. 12. 12トレンチ実測図（1/100）

12トレンチ（Fig. 12）

前方部前縁の1bトレンチの西側に設定した。11トレンチに同じく削平による改変が著しいが、トレンチ中央部でⅠ段斜面の地山整形痕と思われる緩斜面を検出した。これと1bトレンチの葺石基石例を結ぶ線と10・11トレンチの地山整形面を結んだ延長線の交点が前方部の西隅角に当るが、作付け中のためトレンチの設定はできなかった。

2）. くびれ部

東側くびれ部

4トレンチ（Fig. 13・14）

前方部東斜面の後円部寄りに設定した。調査前の東側くびれ部は、墳形を最もよく残していたが、それは開削時の排土が墳丘にそって盛られたためであることが判明した。トレンチの西端で横位に据えられた大ぶりの円礫を検出した。葺石の基石であろうが、葺石上は杉間をぬけた農道下にあたりこれ以上の確認はできなかった。基底面のレヴェルは18.7mを測る。基石下は緩やかに下るフラット面が3mほど続いた後に段を造る。Ⅰ段葺石列を載せた墳丘基底面の地山整形面であろう。

13トレンチ（Fig. 13・15）

4・5トレンチの葺石基石から復原して設定したが、農道下にあたるために1.8×2.5mの小トレンチとなった。現地表下1mでⅠ段目の葺石を検出した。葺石は、基石に40～60cm大の大ぶりの転石を横位に据え、その上に一回り小さめの石をほぼ垂直に2～3段積み上げている。

葺石例の高さは50cmほどで、その上端はⅠ段テラス面となろう。葺石基石列は、まず初めに後円部方向から弧を描きながら積み連ね、その後にその端部から前方部の葺石列を直線的に繋げている。基底面のレヴェルは18.8mを測る。

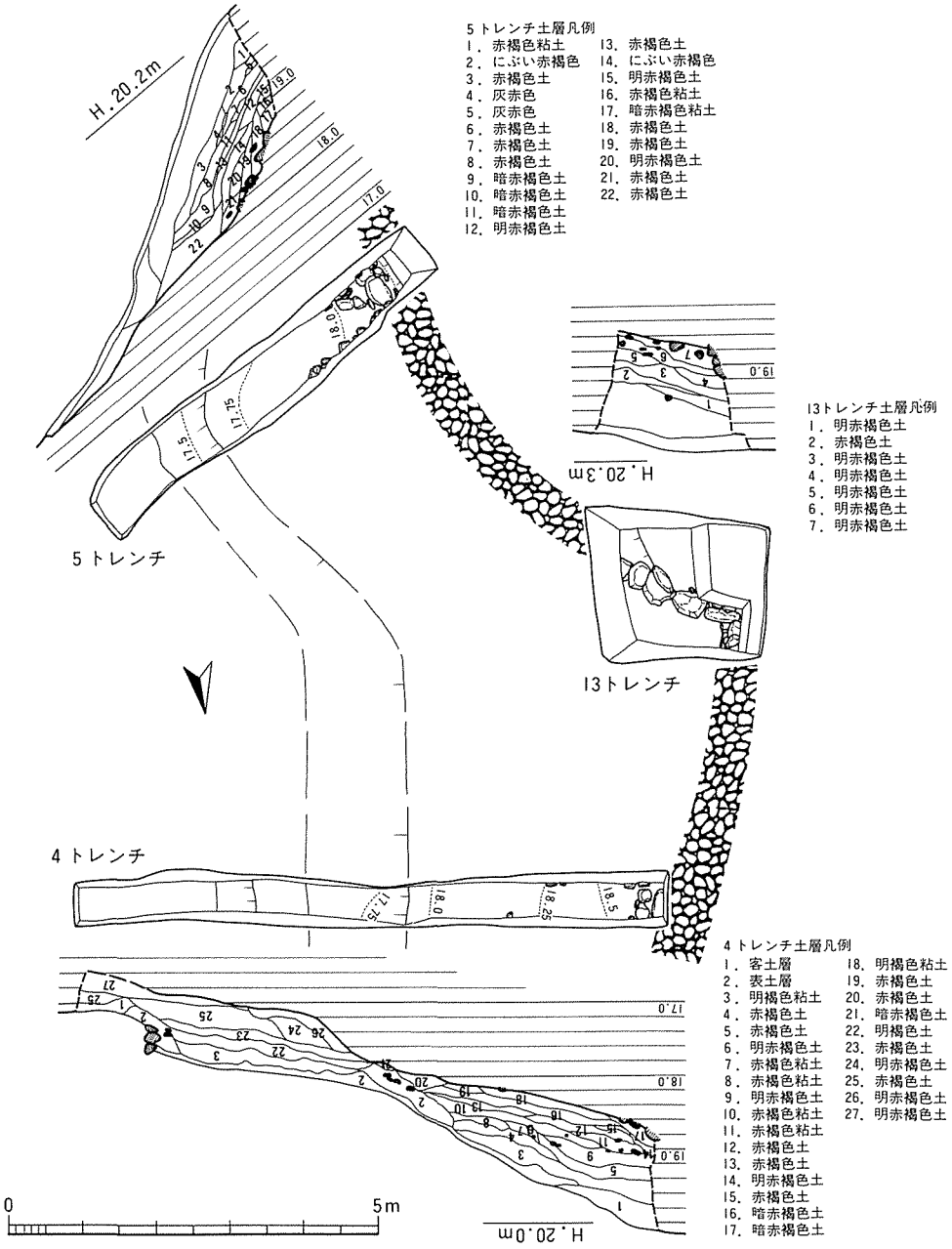


Fig. 13. 東側くびれ部トレンチ実測図（1/100）

5トレンチ（Fig. 13・16）

後円部東側のくびれ部に接して設定した。トレンチ西端でⅠ段目葺石を検出した。葺石は、30～60cm大の大ぶりの花崗岩を横位に据え、その上に10～20cmあまりの転石を貼りつけている。墳丘基底面のレヴェルは18.4mを測る。基石列下は約3mほど続いて段を造る墳丘基底面の地山整形が加えられている。トレンチ上層には高射砲陣地構築時に削平された明赤褐色粘土層が厚く堆積していた。また、この中からは石室の石材として用いたであろう赤色顔料の塗布された扁平割石が出土している。

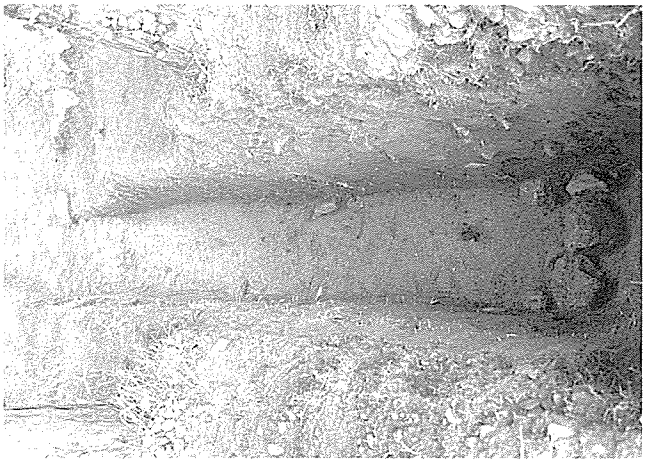


Fig. 14. 4トレンチ全景（北から）

Fig. 15. 東側くびれ部(13トレンチ)葺石基石検出状況(東から)

西側くびれ部

9トレンチ（Fig. 17・18・21）

農道下と桃の樹間に3×3mの小トレンチを設定して西側のくびれ部を検出した。葺石基石には其々のトレンチで観られた如くに大ぶりの花崗岩塊を横位に据えるが、その上位は前方部と後円部では多少の差異が認められた。前方部側は、基石とほぼ同大の転石を基石上に2～3段横位に積み上げている。これに対して後円部は、基石上に同大と小ぶりの転石を混同して積み上げている。一方、後円部と前方部の接点は東側のそれとは異なり、大きめの花崗岩塊を縦に

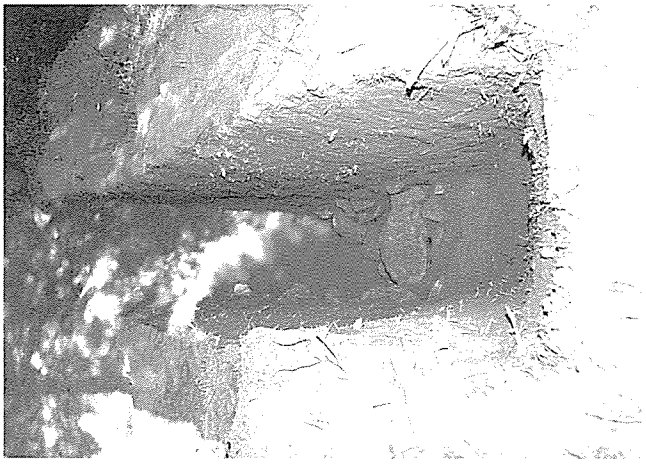


Fig. 16. 5トレンチ葺石検出状況（北から）

して据えその両端から基石列がのびている。墳丘は、地山削り出しによって整形され、葺石は基石上に３～４段を垂直に積み上げた後に小ぶりの転石を地山面に沿って貼りつけたものと思われる。葺石基底面のレヴェルは18.8mを測る。

10トレンチ（Fig. 17・19・21）

前方部西斜面の西側くびれ部に接して設定した。トレンチの東端にはＩ段テラス面があり、中央部では地山削り出しによるＩ段斜面の整形痕が検出されたが、開削による消失が著しい。葺石は消失していたが、基石上を葺いたであろう10～20cmあまりの転石が斜面上に点在していた。西側くびれ部から本トレンチを通して11トレンチの地山整形面はほぼ直線的に繋がる。

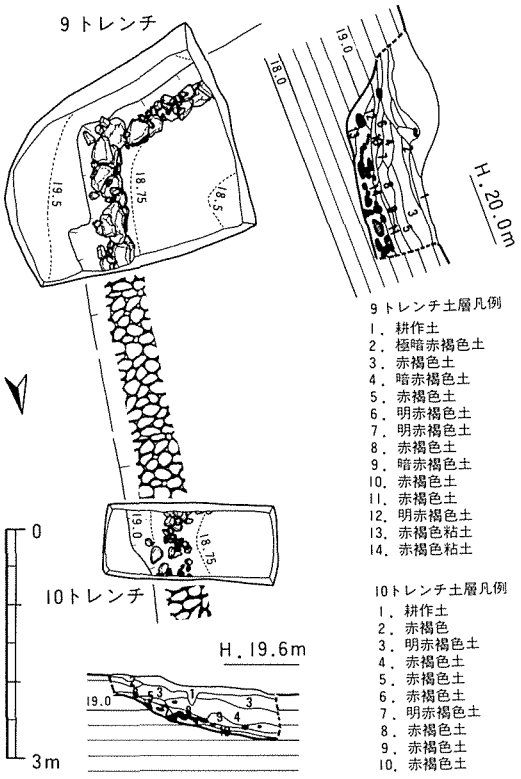


Fig. 17. 西側くびれ部実測図（1/100）

Fig. 18. 西側くびれ部(９トレンチ)葺石(北西から)

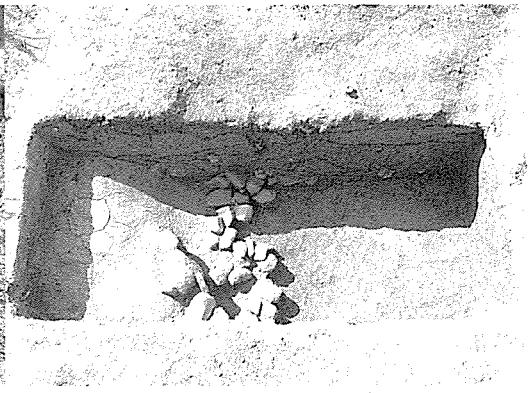


Fig. 19. 10トレンチ南壁土層（北から）

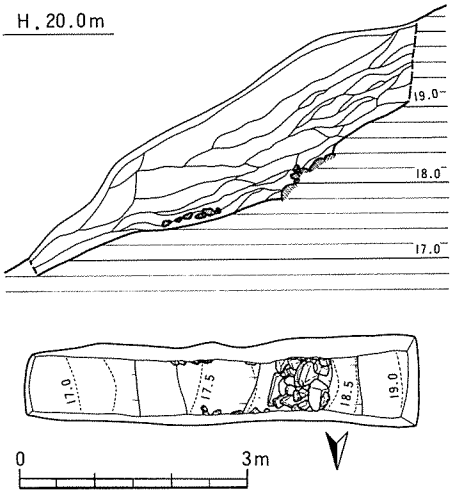
Fig. 20. 後円部全景

Fig. 21. 西側くびれ部(9・10トレンチ)全景

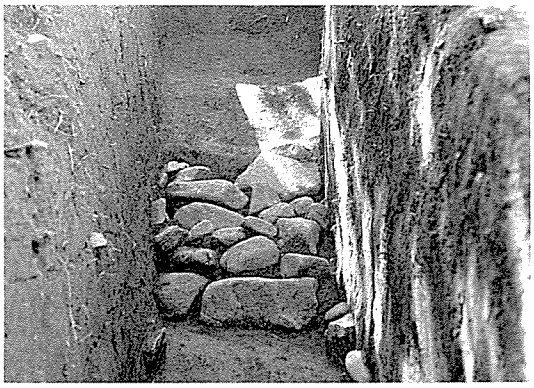
3）．後円部

6トレンチ（Fig．22・23）

後円部東斜面のほぼ中央に設定した。トレンチの西側で葺石を検出した。葺石は、大ぶりの花崗岩塊を横位に据えて基石とし、その上にやや小ぶりの転石を5～7段積み上げている。基石から上位3段は基石と垂直に、その上は地山に沿って積み足している。葺石全体の傾斜は45°、墳丘基底面のレヴェルは17.8mを測る。このⅠ段目葺石は、地山削り出しによる斜面上に築かれ、その上端には緩傾斜面が続くが、7・8トレンチ例からすればこの当たりまでがⅠ段斜面と考えられる。また、葺石基石列下には削り出しによる墳丘基底面が2mほど続いている。この基底面上に流失した葺石に混じって供献したと推定される山陰系の鼓型器台片が出土した。



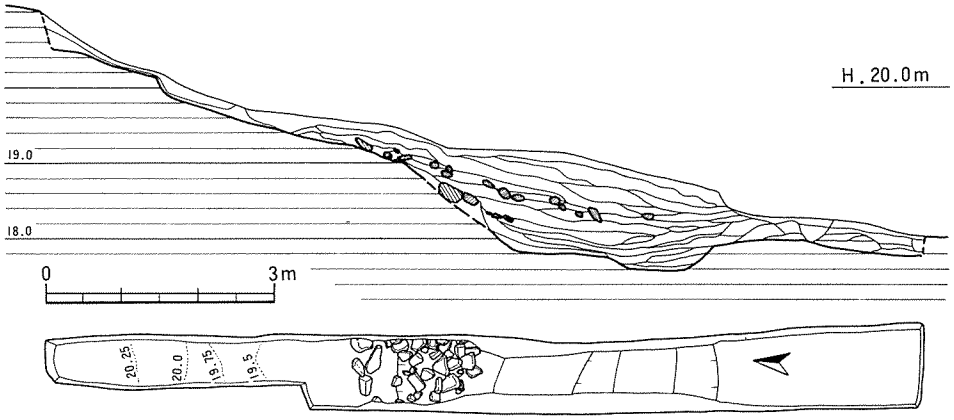
Fig．22．6トレンチ実測図（1/100）



Fig．23．6トレンチ葺石検出状況（東から）

7トレンチ（Fig．24～26）

後円部の南斜面、つまり後円部の後背面に設定した。葺石はそのほとんどが崩落し、墳丘裾線での葺石基石は検出できなかった。Ⅰ段目の斜面は垂直高1.2m、長さは2mあり、外のトレンチ例を圧する。後背からの外観を意識したものであろうか。Ⅰ段斜面上には緩傾



Fig．24．7トレンチ実測図（1/100）

Fig. 25. 7トレンチ全景葺石（南から）

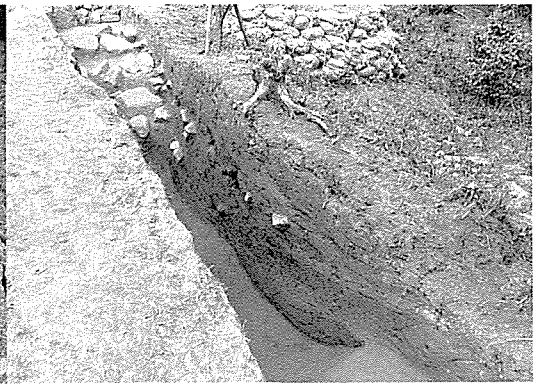


Fig. 26. 7トレンチ墳裾土層断面（南西から）

斜した長めのＩ段テラス面がつき、その北端には低いII段斜面とII段テラス面が続く。また、墳裾は削り出しによる地山整形がなされ、基底面のレヴェルは17.8mを測る。1mほどの墳丘基底面の外側には、外のトレンチでは観られなかった幅1.4m、深さ20～30cmの溝が巡る。

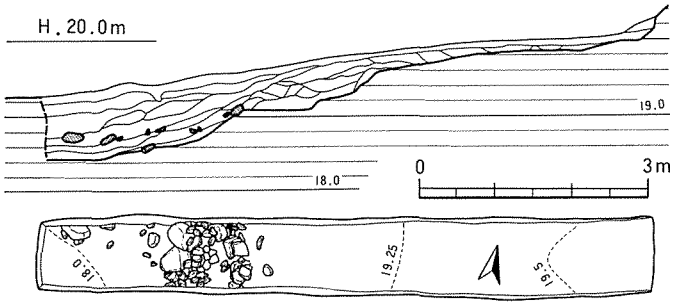


Fig. 27. 8トレンチ実測図（1/100）

8トレンチ（Fig. 27・28）

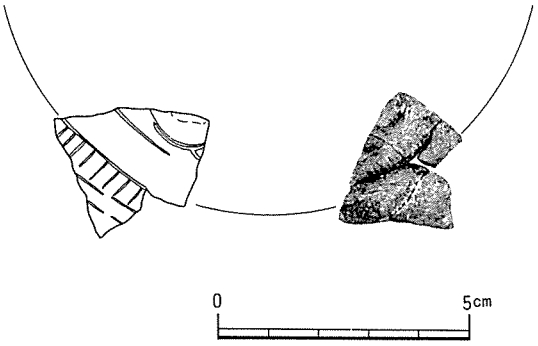
後円部西斜面のほぼ中央部に設定した。トレンチの西側で墳丘基底面と葺石を検出した。Ｉ段目の葺石は、40～50cmの大ぶりの花崗岩塊を基石として、その上に小ぶりの転石を葺いているが流失が著しい。基底面のレヴェルは18.6mで、6・7トレンチに較べるとやや高く、西に緩傾斜する原地形に起因すると思われる。このＩ段斜面上には短いＩ段テラス面がある。また、その東端には垂直高50cm、傾斜角30°の緩いII段目斜面とII段目テラス面が続くが、開墾による削平が加わっているものと思われる。墳丘は地山削り出しによって整形している。

Fig. 28. 8トレンチ葺石（西から）

4）．出土遺物

鏡片（Fig．29）

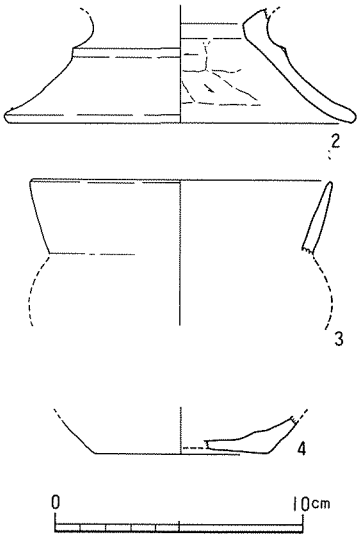
1は墳頂部の攪乱土層中より出土した小片である。大きさは2×3cmで、厚さは櫛歯文帯部で2.1mm、画像文部で3.6mmを測り、面径は17cm前後に復原できよう。内縁には獣形状の高まりがあり、その外縁は細い輪郭線でかたどっている。この文様帯の外側には幅約8mmの間隔で圏線が巡り、その中には小さな盛り上がりが観られる。錆化が著しく判然としないが、銘帯の可能性もなくはない。更に、この圏線の外側には櫛歯文を巡らしている。画像文を獣文とみなすならば、獣文の表現は薄い肉彫り式になったもので、本鏡片は半肉彫獣帯鏡の可能性が考えられる。本鏡の類例としては、京都府の寺戸大塚古墳と大阪府の万年山古墳出土の半肉彫獣帯鏡が挙げられよう。



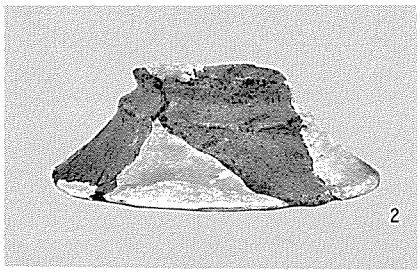
Fig．29．後円部出土鏡片（2/3）

土師器（Fig．30・31）

2は、6トレンチから出土した小型の鼓型器台で、底径は14.0cmを測る。脚部は短くラッパ状に外反して開き、屈曲部下に三角凸帯状のややシャープな段を有する。器受部は脚部に対称する形状をなし、口径は底径よりやや大きくなろう。調整は、外面が横ナデとナデ、内面は屈曲部がナデ、脚部がヘラケズリである。胎土は多量の細～小砂粒のほかに雲母微細と赤褐色粒を含む．焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。**3**は、7トレンチから出土した小型丸底壺の口縁部片で口径は12.0cmを測る。口縁は短く直口ぎみに開く。胎土は精良で、焼成は良好である。色調は明赤褐色を呈する。**4**は、7トレンチ出土の底部で小型壺であろう。底径は6.8cmを測る。胎土は精良で、若干量の石英砂を含む。焼成は良好で、色調は浅黄色を呈する。



Fig．30．6・7トレンチ出土土器実測図(1/3)



Fig．31．6トレンチ出土土器

Ⅳ．埋葬施設

後円部の墳丘は、明治時代初めに建立された「宮崎安貞」碑と高射砲陣地の構築に際してそのほとんどが失われ、今は西半の残丘を留めているにすぎない。埋葬主体は、この石碑の建立時に消失し、今となってはそれを確認する術はない。しかしながら、東側の５・６トレンチからは、小口部等に赤色顔料の塗布された扁平な割石材が掻き出された封土に混じって出土している。このことは、本墳の埋葬施設が竪穴石室系の構造を有したであろうことの消極的な証左となりえよう。

また、墳頂部のほぼ中央部には、墳丘軸線にほぼ沿って２枚の立石

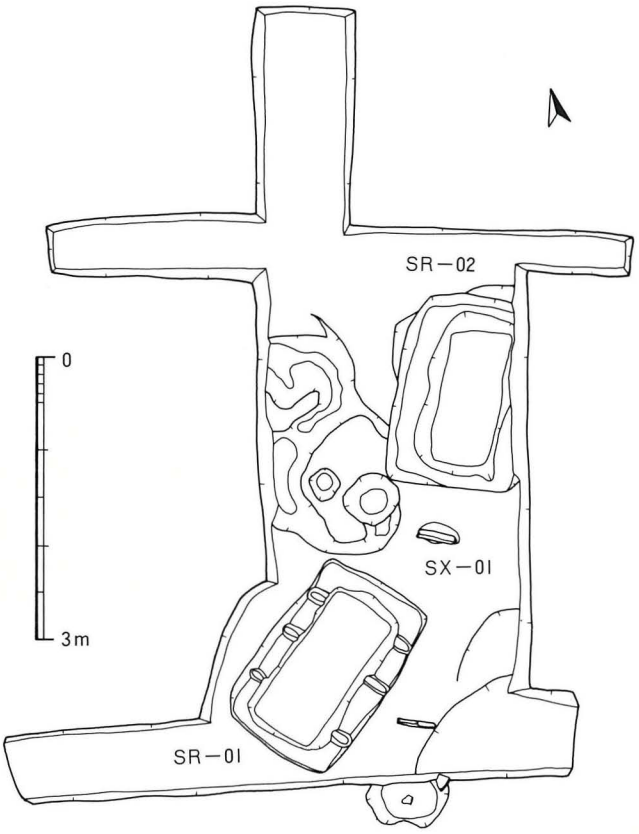


Fig. 32. 後円部遺構実測図（1/80）

Fig. 33. 後円部墳丘下全景（南から）

状遺構（ＳＸ－01）がみられた。立石は石室材と同じ扁平な割石で、旧表土上から掘り込まれている。この旧表土下の遺構は、弥生時代中期初めの土壙墓のみであることからすれば、この立石は古墳の築造時に構築されたものと考えられる。とすれば、この立石の有する機能とは如何様なものであろうか。土壙墓上の堆積土には攪乱がなく、しかも床面上からは石室の基石面どころか掘方すら検出されておらず、棺障の一部とは考えがたい。しからば短絡的ながら、石室の構築に際して何らかの祭祀的意味を込めて、その床面下に埋設されたものと考えられよう。その祭祀は必然的に葬送儀礼に伴うものであるが、いずれにしても石室下に埋設された遺構例は少なく、詳細な検討が必要である。

ＳＸ－01（Fig. 34・35）

後円部のほぼ中央部にあり、主軸方位をＮ－８°－Ｅにとる。立石には35×40cm余、厚さ３～５cmの扁平な割石を５～７°内傾させて掘込み、石棺墓の小口状をなす。板材間は1.9ｍを測り、天端の比高差は８cm程南側が低い。この南側の立石材には赤色顔料が塗布されていた。また、この立石のすぐ南にはベンガラの混入した灰黄褐色粘土塊があった。

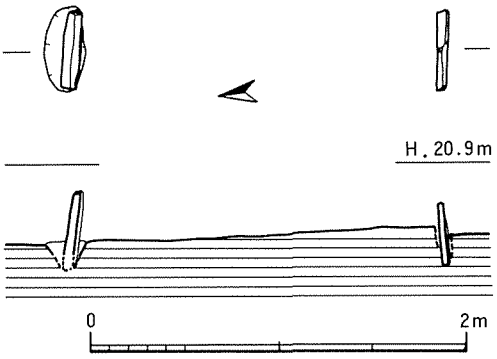


Fig. 34. ＳＸ－01実測図（1/40）

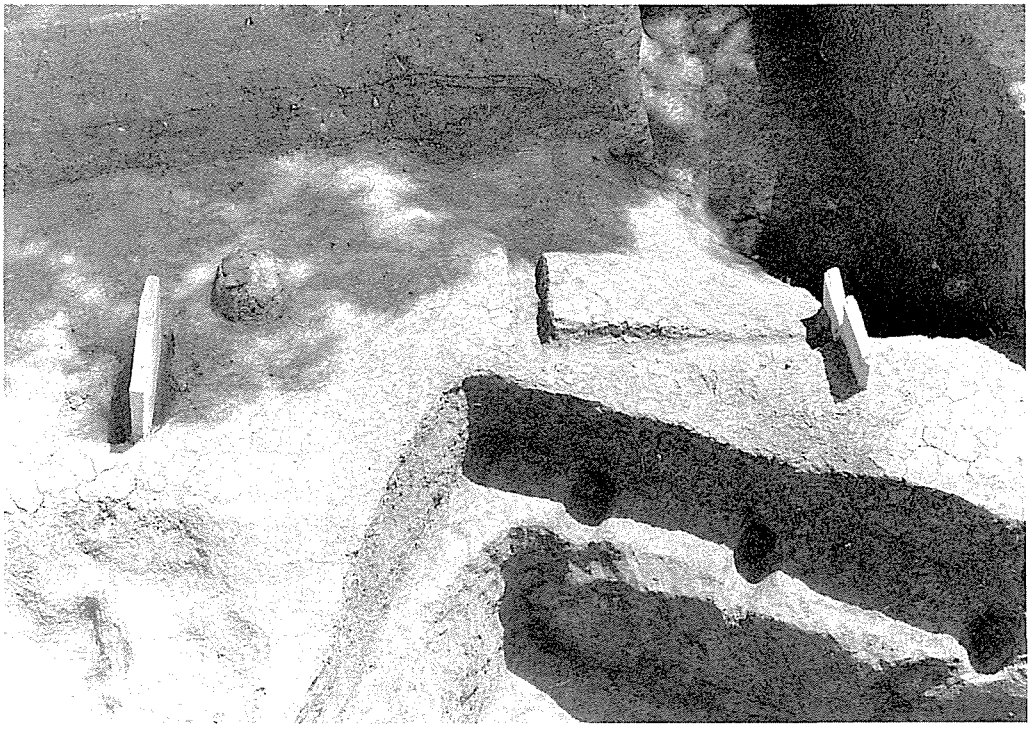


Fig. 35. 後円部墳丘下立石（西から）

Ⅴ.その外の遺構

後円部墳頂下の調査では、古墳の石室構築に関わると思われる立石状遺構の外に２基の土壙墓を検出した。土壙墓は、長方形プランを呈する二段掘り構造のもので、いずれも木棺墓であった可能性が考えられる。土壙墓の棺内及び墓壙上には供献土器等の遺物がなくその時期は明らかにしがたい。しかしながら、ＳＲ－01のすぐ東から弥生時代中期初めの高坏片が出土しており、ここにその年代を求めることができよう。調査範囲が、２×４ｍのトレンチ状のために確認した土壙墓は２基であるが、周辺の屋根筋には弥生時代中期初頭を前後する時期の墳墓群が展開している可能性が考えられる。

ＳＲ－01(Fig.36・37)

後円部の南寄り、墳頂下の立石状遺構ＳＸ－01のすぐ西に位置する。墓壙は主軸方位をＮ－48.5°－Ｅにとり、二段掘りの構造をなす。まず初めに長軸210cm、短軸139cmの一段目の墓壙

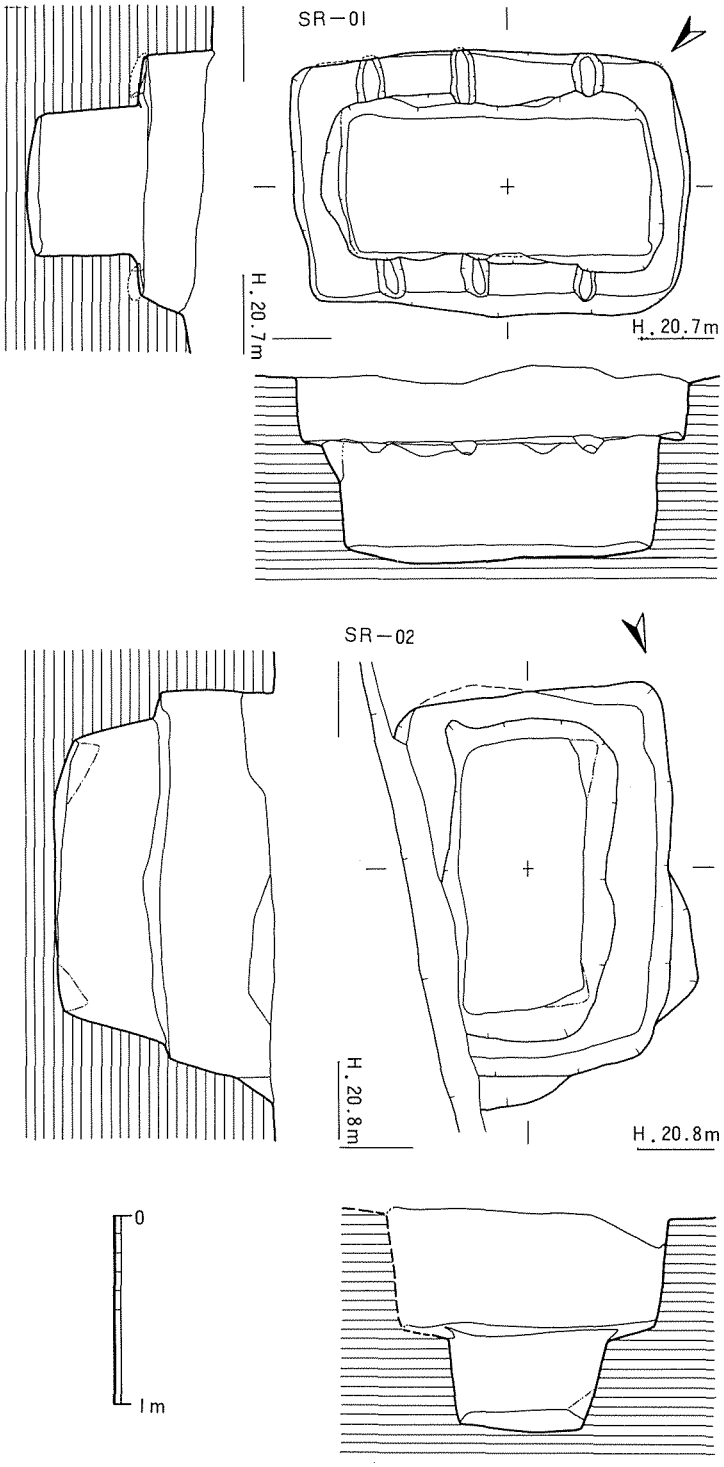


Fig. 36. ＳＲ－01・02実測図（1/40）

を30～35cmの深さまで垂直に掘り、次に壁面より15～25cmほど中央寄りに二段目の墓壙を掘り込んでいる。二段目の墓壙は、長軸170cm、短軸80cmで、垂直に立ち上がる。壁面は深さ63cmを測る。この二段目の墓壙上面には、幅約15cmの溝状の掘込みが小口に並行して3条ある。横木を渡した上に覆蓋をしたものであろうか。壙底は東小口側が浅く窪み、断面形は箱形を呈する。西小口の側壁際には幅5cmほどの浅い切り込みがあり、木棺墓の可能性も考えられる。遺物は1点も出土していない。

ＳＲ－02（Fig. 36・38）

後円部墳頂下のほぼ中央部にあり、ＳＸ－01の北側小口石のすぐ北に位置する。墓壙は二段掘りの構造をなし、主軸方位をＮ－17°－Ｅとなる。一段目の墓壙は長軸205cm、短軸150cmの長方形プランをなし、ほぼ垂直に55～60cmほど掘り込んでいる。二段目の墓壙はこの壁面から小口側で10cm、側壁側で20cmほど内に寄って掘り込まれている。内法は、長軸が172cm、短軸が85cm、深さは50～55cmを測る。壙底は中央部が浅く窪み、緩傾斜して立ち上がる壁面は浅い舟底状の断面形をなす。小口部の側壁際には板材を押し込んだような痕跡があり、棺本体に組合式の木棺を用いた可能性が考えられる。遺物は出土していない。

Fig. 37. ＳＲ－01（西から）

Fig. 38. ＳＲ－02（北から）

Ⅵ．おわりに

山ノ鼻１号墳の墳丘調査は、可耕されている畑地や果樹の間隙を縫って必要最小限の範囲で実施した。従って得られた情報では古墳全体を理解するのに不十分な点が少なくない。殊に、後円部墳丘の開削による埋葬主体部の消失は致命的な損失であった。ここでは明らかになった情報の範囲で復原を試み、今後に備えたい。

古墳は、下谷古墳と若八幡宮古墳を載せた舌状丘陵の尾根端に位置する。墳丘は尾根上の高まりに後円部を配し、その背面の尾根筋を切断することによって墳丘の威容を高めている。

墳丘は、１段基底面を地山削り出しによって整形し、前方部は２段、後円部は３段に築成されていよう。葺石はⅠ段斜面全体に見られる。しかし、Ⅱ段斜面の基部にあたる１－ｂトレンチの溝内にも石材の転落があることから、葺石は墳丘の各段斜面に貼り巡らされていたろう。埴輪はない。Ⅰ段目の基底面レヴェルは、前方部前縁と後円部が17.8～18.2ｍにあるのに対し、くびれ部は18.8ｍと高くなり墳丘基底面は中央部が山形に競り上がる側面観をなす。また、後円部の横断面は西側基底面が40cmほど高い。これは丘陵の東が険しく、西が緩やかであることによる立地上の制約によるものであろう。

墳丘規模は、前方部東縁の隅角が不詳ながらも全長50ｍ、後円部径22～23ｍ、前方部長28.5ｍ、前方部幅17ｍ、くびれ部幅8.5ｍに復原できる。ただし、くびれ部は東西で若干のずれがあり、くびれ部角から起算した前方部隅角までの長さは、東側が28.5ｍ、西側が30.5ｍになる。そのために後円部も正円ではなく、南北に圧縮された形状で俯瞰はやや歪んでいる。

墳丘企画については詳報しえないが、後円部８区画に対して前方部長は10区画、前方部幅は６区画で企画され、前方部の狭長な墳形を示す。これは定形化した前方後円墳の前方部長が５～８区画で納まるのに比べて特異な築造企画を有するもので、同企画比を示す奈良県の東殿塚古墳にその類型を求めることができる。

次に、古墳の築造年代については埋葬主体部が消失した上に埴輪等もなく積極的な遺物に乏しい。銅鏡は、半肉彫獣帯鏡とすれば後漢初頭の鋳造になるが、伝世し積極的な証左とはならない。とすれば、６トレンチ出土の山陰系の鼓型器台に依拠せざるをえない。この鼓型器台は、屈曲部に巡るややシャープな凸帯や内面の篦ケズリ等の調整手法は布留式古相の特徴を有し、出雲地方の所謂小谷式の新相につづいて位置ずけられるもので、消極的ながら４世紀代中ごろの年代観が与えられよう。となれば、本墳は４世紀後半代とされる若八幡宮古墳に先行するもので、今宿平野最古期の前方後円墳となり、山ノ鼻１号墳→若八幡宮古墳→鋤崎古墳→丸隈山古墳という首長墓の変遷図式が描かれよう。このことは今宿平野の初期古墳が、定形的前方後円墳の採用に先行して不定形の前方後円墳が導入されたことを意味し、形成期古墳の在り方の一様相を示す証左となりうるもので、今後の更なる検討と深化が求められる課題である。

鏡片の保存処理と付着した赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター　本田　光子

鏡片の保存処理

鏡は小片が５ケで、表面は全体的に土が付着し、それに混じって赤色物が認められた。新しい割れ口を持つ破片がありその断面を見ると、芯に光沢のある金属質が薄く残り、黒色、赤紫色、白紫色の順で錆の層が形成されていた。表面は粉状で文様は溶けたような状態であった。

赤色物を針先に着く程度採りプレパラートを作成した後、ベンゾトリアゾール(以下ＢＴＡ)２～３％エタノール溶液に一昼夜浸漬し、自然乾燥した。ＢＴＡ浸漬含浸→自然乾燥を二回繰り返し、パラロイドＢ72（含ＢＴＡ）３～５％を一昼夜浸漬含浸した。表面の土をメスで取り除いた後、パラロイドＢ72（含ＢＴＡ）７～10％を30mmHg以下で２時間減圧含浸した。なお表面状態が悪く、文様等がはっきり理解できなかったので土と錆の除去は最小限にとどめた。

赤色顔料の分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として、赤色顔料が付着している部分とない部分を鏡片のままで蛍光Ｘ線分析を行った。赤色顔料の主成分分析としては鉄、水銀、鉛が考えられる。鏡片からは鉄、鉛が検出され水銀は検出されなかった。鉛は銅に対する強度比から見て、鏡本体に由来するものと判断できる。顕微鏡観察では、赤色顔料としてはベンガラ粒子のみが認められた。このベンガラにはパイプ状の粒子が多量に含まれていた。以上の結果から、鏡片に付着した赤色物は管状粒子を含むベンガラである。

山ノ鼻１号墳の鏡にはベンガラが付着していた。本古墳で赤色顔料がどの様に使われていたか、今回の調査・分析からだけでは推定できない。一般に古墳出土の鏡に付着する赤色顔料はベンガラより朱が多いと思われている。遺骸には朱を用い、鏡はそれに近接する場合が多いから当然ではあるが、実際には遺骸にベンガラが使われていないから朱だけが着いていたのではないだろうか。前期古墳では、鏡に朱が認められずベンガラだけであったからと言って朱が使われていなかったとは考えがたい。朱は少量が使われていたが、今回の様な状況ではたまたま発見されなかったと理解したい。むしろ、鏡に付着残存するほどの量のベンガラが遺骸に使われていたと推定されることを事実として評価したい。前期古墳では赤色顔料として朱（硫化水銀HgS）のみを使う場合と、朱(硫化水銀HgS)とベンガラを使う場合があるが、ベンガラだけという例は今の所ないからである。そして北部九州地方では今までの数少ない資料から見るかぎり、前者より後者の方がオーソドックスであるといえなくもないのである。

※測定をお引き受け下さいました宮内庁正倉院事務所成瀬正和氏に感謝致します。

山ノ鼻１号墳出土の鏡片の材質分析

昭和女子大学　　江本　義理

はじめに

青銅製遺物の埋蔵環鏡における劣化状態を調査する目的で、出土した小鏡片（約５×５㎜）の提供を受け、修復前に小試料（鏡片）を合成樹脂に包埋し極く先端を切断し切断面において鏡の残存部があればその箇所ではＥＭＰＡ法での成分分析、サビの部分で腐食生成物のＸ線分析を行うこととした。分析後は試料を削り出し、修復処置に供せられるよう工夫した。

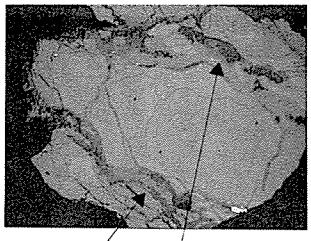
包埋方法

小試料に『セメダインＣ』を何回も厚く塗装し、試片の固まりを作る。これを包埋用樹脂（ポリエステル系）で埋め込み必要箇所を切断、研磨、分析した。

分析法　地金部分ＥＭＰＡ

《小鏡片》

《埋め込み試料断面図》



結　果

埋め込み試料断面は約２㎜径で、肉眼観察では三日月状に光る部分が見られる。走査型電子顕微鏡観察では大部分に金属組織様の模様が見られる。（組織かどうか不明）

ＥＭＰＡによる元素分析の結果、リング状に銅がありこの部分にはスズ、鉛は存在しない。この層は幅100μ前後であり、この部分が残った金属部であろうか。

大部分の金属組織様に見える部分からはスズ、鉛が検出され、銅はわずかである。ここがサビ層であろうか（選択的にスズ、鉛の腐食物ができているのか）。

これらの層の間を繋ぐ形で塩素の多い部分が認められる。厳しい腐食環境を示唆している。この場合銅が溶出していてサビになっている。処によりCu－richのサビの塊があるのであろうか。

考　察

鏡の先端部で腐食が激しく普通の腐食形態である。地金が中心に残りそのまわりに腐食生成物が生成されているケースとは考えられない。今回は遺物を分析用に貸与していただき極く一部分をＥＭＰＡ用に研ぎ出して分析し、その後認料を返却する形がとれるようにしたことで返却した試料がうまく修復に利用できるかが成功の鍵を握ることになり、今後の材質調査方法にこのような方法が拓けることを希望するものである。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第309集

山ノ鼻１号墳

1992年３月13日

発行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神１－８－１

印刷　大野印刷株式会社